

和 装 の 現 状 と 将 来

浜ちりめん工業組合理事長 石 居 良 造

我が国経済も80年代に入って今日迄戦後最長と云う不況期が続いたが、政府発表では昨年2月を底とし漸く輸出主導形による回復基調を示し、米国を中心とする先進国経済の回復は我が国経済にも着実な回復過程を示した。こうした中で個人消費や住宅投資等内需が低い伸びにとまり、地域間格差も広がって来た。

繊維の中でも合繊はいち早く回復し又毛、麻産地によっては堅調に推移をしているが、絹業にあっては生糸一元輸入に伴う内外生糸価格差を始め輸入織物による圧迫、事業団在庫膨張と糸価下相場の下支えの硬直化によって仮需が激減し、加えて末端需要の減少による慢性的生産過剰の中で苦しい経営を余儀なくされ、昨年7月全国産地が同調し一元制度撤廃運動の一環として5日間の一斉休機を実施したのであります。

各産地に於ても絹業に見切りをつけ転廃業が続き57年、58年と織機の共同廃棄は20,667台となるなど波乱万丈をきわめた30年間を思い起すとき感慨無量であります。

59年6月15日横神の生糸取引所の生糸相場は安定下位価格を割り込み、41年安定制度発足以来初めてのことであり、日製協の方針転換と農水省の事業団在庫減らしを政策の最優先に据え制度価格の維持を弱めることの止むを得ないとの姿勢を鮮明にした事も指摘され、農水省も茲にきて何等かの対策の必要にせまられている。織物産地もこゝに来て減産効果が見られただけに糸価の不安定に依る新規商談は困難となった。

59年6月29日西陣ネクタイ訴訟は生糸一元輸入制度は合憲として請求を棄却されたが、法的には問題はないと指適されたこの制度も事実上空洞化され、この制度を運用する蚕糸砂糖類価格安定事業団も経営的破たんをきたした状態であり臨調答申は制度を含めた見直しを迫り農水、通産両省とも研究会を発足させ検討中で、近く結論が出るものとみられる。しかし制度の矛盾を国民の前に一層明らかにし、国の蚕糸行政への見直しへ一石を投じたといえよう。

昭和58年度全国絹白生地生産実績と59年度生産計画

<提出 16産地>

組 合 名	巾別	単位	㊤昭和57年度 生産実績	㊤昭和58年度 生産実績	前年実績 対比%	㊤昭和59年度 生産計画	㊤ %
丹後織物工業組合	小巾	反	5,622,086	4,853,861	86.3	4,180,000	86.1
西陣織工業組合	小巾	反	59,742	59,830	99.3	60,000	101.1
兵庫県絹人絹織物工業組合	小巾	反	408,766	334,836	81.9	335,000	100.0
浜縮緬工業協同組合	小巾	反	1,228,948	1,103,903	89.8	1,038,000	94.0
中屋織物工業協同組合	小巾	反	92,262	100,528	109.0	100,000	99.5
	広巾	m ²	88,464	87,580	99.0	90,000	102.8
前宮織物工業協同組合	小巾	m ²	450,020	395,530	87.9	419,000	105.9
	小巾	反	1,289,906	898,179	69.6	863,000	96.1
福井県絹織物工業協同組合	広巾	m ²	11,592,149	9,513,349	82.1	9,350,000	98.3
	小巾	反	1,276,940	1,067,442	83.6	1,120,806	105.0
加賀市織物協同組合	小巾	反	265,156	196,868	74.2	236,000	119.8
	広巾	m ²	412,858	467,737	113.2	410,000	87.6
小松織物工業協同組合	小巾	反	940,400	887,800	94.4	848,000	95.5
城端織物工業協同組合	小巾	反	218,149	199,367	91.4	179,000	89.8
五泉織物工業協同組合	小巾	反	807,958	746,117	92.3	730,000	97.8
	広巾	m ²	147,146	128,450	87.2	140,000	109.0
十日町織物工業協同組合	小巾	反	11,140	11,450	103.0	11,500	100.4
加茂織物工業協同組合	小巾	反	232,393	220,636	95.0	197,000	89.3
	広巾	m ²	68,633	74,721	109.0	78,000	104.4
長野県織物工業組合	小巾	反	49,950	50,000	100.1	50,000	100.0
日本裏絹組合連合会	小巾	反	1,707,954	1,613,764	94.4	1,550,000	96.0
合 計	小巾	反	14,661,770	12,739,612	86.9	11,917,306	93.5
	広巾	m ²	12,309,250	10,271,837	83.4	10,068,000	98.0

※1

※2

※ 1 広巾を一部含むが、数字は全て反換算。

※ 2 埼玉、群馬、長野の3産地のみ。

産地別（46産地）生糸類消費高

（単位：俵）

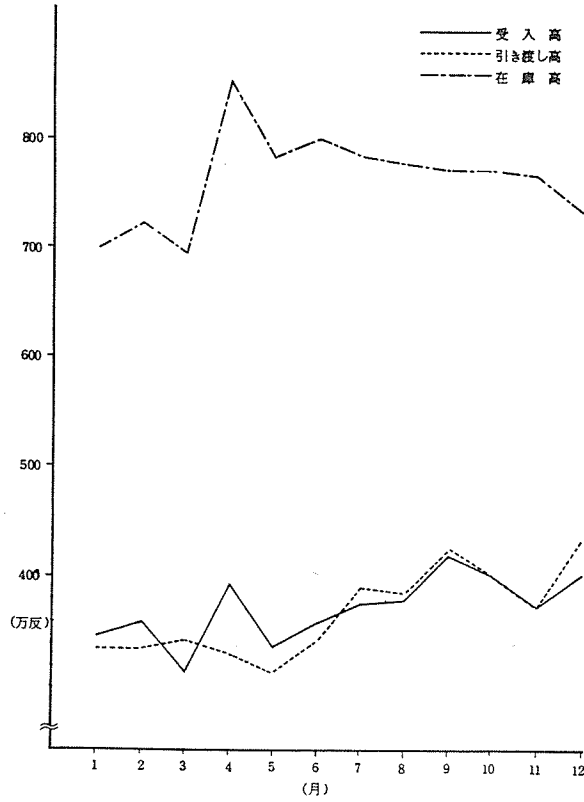
産地名	生糸消費高 （玉糸を含む）			野蚕糸		手紡絹糸		絹紡糸・絹紡紬 糸・紡糸	
	57年	58年	前年比	57年	58年	57年	58年	57年	58年
丹 後	93,423	80,824	87%					311	339
西 陣	49,773	50,069	101					19,113	18,582
福 井	22,659	17,398	77	18	24			3	34
長 浜	18,848	16,991	90					600	469
小 松	17,512	16,834	96	165	125			203	52
五 泉	11,680	10,768	92						
春 江	12,378	10,251	83						
福 島	8,532	7,709	90	714	433			124	81
博 多	6,829	6,537	96					1,300	1,744
米 沢	6,546	6,251	95			137	114	492	540
鶴 岡	899	852	95					60	44
長 井	331	278	84					124	109
本 場 結 城						239	235		
石 下 結 城	1,045	997	95					794	760
下 妻 生 絹	367	311	85						
足 利 内 地	556	538	97	200	199			204	111
桐 生 内 地	2,881	2,228	77					1,178	1,099
桐 生 輸 出	1,205	1,260	105					48	72
群 馬 生 絹	5,319	5,073	95						
伊 勢 崎	1,385	1,096	79	193	152	227	179	2,038	1,613
秩 父	481	396	82					166	119
埼 玉	5,860	5,445	93						
村 山	1,438	1,160	81						
八 王 子	3,390	3,231	95	43	41	45	42	951	824
神 奈 川 県	121	108	89						

産 地 名	生 糸 消 費 高 (玉糸を含む)			野 蚕 糸		手 紡 絹 糸		絹紡糸・絹紡細 糸・紡糸	
	57年	58年	前年比	57年	58年	57年	58年	57年	58年
山 梨 県	4,515	4,671	103%					557	578
長 野 県	469	660	141			268	292		
十 日 町	4,977	4,017	81		4	1,382		34	1,253
加 茂	2,854	2,809	98					57	119
塩 沢	310	307	99			121	110		
小 千 谷	790	739	94			606	567		
城 端	2,065	1,966	95						
石川県(金沢)	3,574	3,386	95						
根 上	4,268	4,245	99						
加 賀	2,104	1,811	86						
浜 松	188	167	89	193	173			3,405	3,138
羽 島	13	11	85					27	17
前 宮	910	898	99					444	378
中 屋	1,026	1,054	103						
但 馬	6,041	4,908	81						
鳥 取 県	97	67	69			2	2		
久 留 米	9	7	78	3	2				
都 城	54	40	74						
鹿 児 島	3,898	4,134	106						
奄 美 大 島	2,627	2,594	99						
沖 縄	265	155	58			100	88	22	15
合 計	314,512	285,251	91	1,529	1,153	3,122	1,629	32,755	32,090

	昭和57年生産実績	昭和58年生産実績	前年実績対比
46絹織物産地生糸消費量(暦年)	314,512俵	285,251俵	90.7%
縫 糸, 組 ひ も	7,859俵	7,088俵	90.2%
合 計	322,371俵	292,339俵	90.7%
白 生 地	195,076俵	約 180,000俵	

室町問屋筋における絹織物流通統計調査

(昭和58年)



《資料：京都府統計課》

昭和59年度 1月～4月 室町問屋筋在庫実績

	受入高	引渡高	在庫
1 月	310,4 千反	307,4 千反	649,5 千反
2 月	321,6	308,4	662,6
3 月	285,6	314,0	634,2
4 月	349,0	296,4	687,2

最近の集産地状況

生糸相場安定制度は大きな危機に直面し実態経済が大きく浮び上がり、呉服流通市場の在庫、及び機屋の仕掛在庫、糸商、製糸業界の影響も大きく急激なショックを受けない様農水省の対策を望むものである。

昭和59年5月の糸価暴落より不安感と不透明な現状により7月後半の売約定は出来ず、今迄多少生糸相場下落に対しても白生地価格は安定した状態であった。最近は無地織物や紋織物にあっても無地感覚に近い素材が使用され、長浜の変無地及古代が5月、6月とは必要とされ前年同期迄生産が回復した。丹後に於ても紋から無地に変る機屋もあり、5月の生産も回復し久し振りに明るさが出た。

現在、秋冬物の見本付けも終り、8月の中旬以降迄は必要量のみの発注になると思われる。前売筋は京都祇園祭等を利用して販売に努力するが、染問屋迄はその波及は出ないものと思われる。

たゞ最近の変織、又一越、古代等は総て系列化され納入先がきまっているのが今迄と変わった点である。

丹後及長浜の昭和59年1月～5月迄 生産実績

	丹 後	前年対比	長 浜	前年対比
1 月	305,932反	84.0%	81,258反	88%
2 月	399,236	84.2	85,380	87
3 月	383,512	86.6	92,862	82
4 月	425,752	89.9	92,190	97
5 月	345,589	88.1	97,039	105
6 月			約 100,000	100

きもの小売店販売の現状

買取及び委託販売の割合

(%)

区 分	買 取 販 売						委 託 販 売					
	55 上期	55 下期	56 上期	56 下期	57 上期	57 下期	55 上期	55 下期	56 上期	56 下期	57 上期	57 下期
百 貨 店	52.2	53.3	54.4	37.3	37.8	40.8	47.5	46.7	45.6	62.7	62.2	59.2
専 門 店	77.7	75.7	77.9	79.3	74.9	75.8	22.3	24.3	22.1	20.7	25.1	24.2
全 体	61.9	61.8	61.7	54.3	49.2	52.6	38.1	38.2	38.3	45.7	50.8	47.4

正絹呉服の仕入回転数（年間）

区 分	回 転 数					
	55 上期	55 下期	56 上期	56 下期	57 上期	57 下期
百 貨 店	2.4	3.6	3.5	2.7	2.6	3.0
専 門 店	3.7	3.9	3.6	3.5	3.7	3.6
全 体	2.9	3.7	3.6	3.0	2.9	3.2

店頭、催事、訪問販売の割合

(%)

区 分	店 頭 販 売						店 内 催 事 販					
	55 上期	55 下期	56 上期	56 下期	57 上期	57 下期	55 上期	55 下期	56 上期	56 下期	57 上期	57 下期
百 貨 店	56.7	56.1	55.4	49.5	49.4	52.4	24.2	25.7	26.1	29.1	29.6	26.1
専 門 店	34.1	34.3	35.5	32.7	33.0	32.6	22.7	24.6	24.8	21.0	20.2	23.8
全 体	48.3	48.1	48.9	43.0	44.4	45.7	23.7	25.3	25.7	25.9	26.7	25.3

区 分	店 外 催 事 販 売						訪 問 販 売					
	55 上期	55 下期	56 上期	56 下期	57 上期	57 下期	55 上期	55 下期	56 上期	56 下期	57 上期	57 下期
百 貨 店	12.1	10.9	13.2	12.1	12.8	13.7	7.0	7.3	5.3	9.3	8.2	7.8
専 門 店	20.5	19.7	17.9	23.0	21.9	20.8	22.7	21.4	21.8	23.3	24.9	22.8
全 体	15.2	14.1	14.7	16.3	15.6	16.7	12.8	12.5	10.7	14.8	13.3	12.9

絹 需 要 対 策

絹の消費拡大に対し今迄各種の対策が行われたが効果はあまり出ていない。むしろ消費の減少が続いている。

事業団に於ても新規用途または販路向け売渡しの推進が行われている。今後は洋装分野への進出拡大が望まれるが、価格が高く他の繊維との価格差及絹の欠点を改善し、日本の染色技術を生かした商品化を進めるべきである。

59年6月26日付毎日新聞は“きもの人気いま東欧で、”と報道し素材、色、デザインなどバラエティに富んで、おしゃれ着として十分着こなせると、日本調のきものなどに熱い視線が集まった等、今後海外にも目を向ける事が必要である。

着物消費の拡大

- 1) 絹の使途は90%が和装用である。特に今迄のフォーマル指向から付下げ、訪問着に対する需要拡大を図るべきである。特に着る魅力により本人を一層美しくし、着る年代の方々に経済性、ファッション性、オリジナル性等アピールすべきである。
- 2) 着物価格及流通の近代化
- 3) きめこまかな消費者対策と着る人からの情報収集。
- 4) きものを着る機会の増大。
- 5) きもの既製化と機能性の向上。

複合化について

- 1) 生糸の持つ特長を生かし欠点を補う複合素材の開発
- 2) 野蚕糸の活用と複合絹織物の開発

高品位生糸について

- 1) 防しわ性向上、かさ高性増大生糸
随分と試織されたが、精練後に於て余り変らない。
- 2) 光沢性向上生糸。

原料生糸の現状と要望

以下の数値及びグラフ等については滋賀県繊維工業指導所で行われた長浜産地の各機屋から無作為に抽出された原料生糸の品質調査結果表より抜粋したものである。

調査の期間区分は、昭和58年度春蚕期生糸及び秋蚕期生糸である。

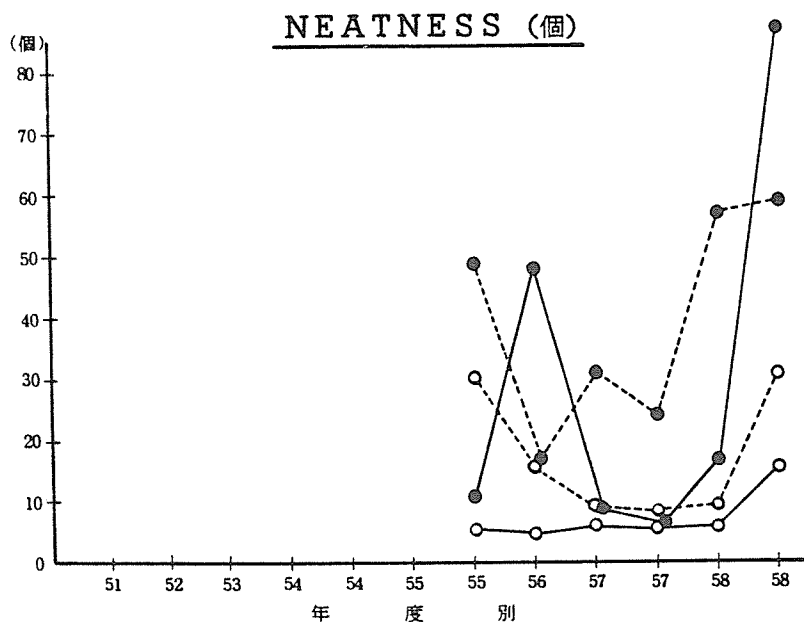
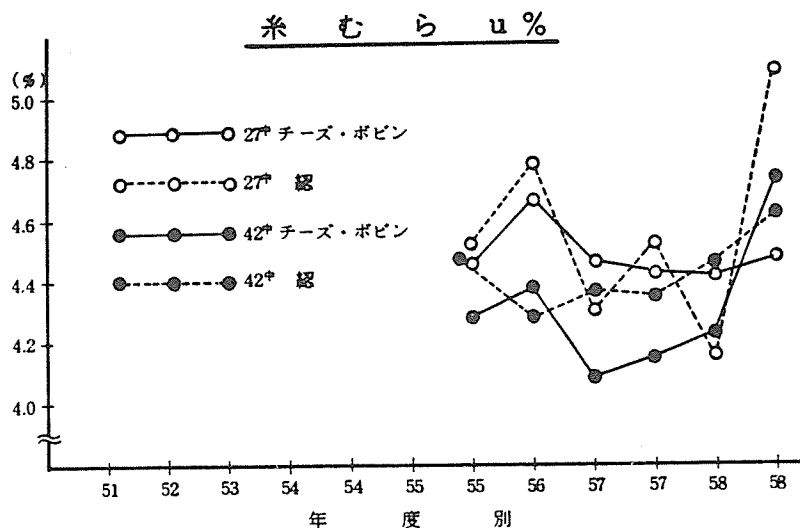
- 1) 糸むら(%)、節(個) (試験機 ウースター I S)

		u%	小節	中節	大節
ボビン・チーズ	58年春	4.27%	5.6(個)	1.5(個)	1.8(個)
"	" 秋	4.89	15.1	2.8	2.3
かせ糸	58年春	4.16	9.8	1.1	0.4
"	" 秋	5.09	31.9	2.8	0.9

糸むらは全体にu%が高く大変悪い傾向である。

節については形状別(コーン・チーズ・ボビン・かせ)の比較について何れも増加している。節、織度むら等の増加に加え、最近の市場は苛酷な迄に織物の精度向上が要求され機屋の欠陥商品としてクレームが相次ぎ合織織物同様の均斉さが求められている。これ等に対応すべく産地で

は節除去のスラブキャッチャーの取付、人員の増強等可能な限りの投資と努力をしているが機屋だけの努力だけでは如何にもならない時期に來ている。普通規格の変無地 12m 1 反中の経糸 8,500 本、緯糸約 30,000 本の中に 1 ~ 2 個の節があれば 2 級品に格下げされて織工賃等諸経費が出ずみすみす損を受けなければならない。この現実をどう受止めていたゞているのか、又糸屑量の増大等企业にとっては大きな損失である。



2) 織 度 (d)

チーズ・ポビン	58年春	27.22 d	平均
"	" 秋	27.29 d	"
か せ	" 春	26.74 d	"
"	" 秋	26.27 d	"

上記は何れも見掛織度である。チーズ類については、油分があるので織度は太くなる。現状に於ての問題点は同一メーカーでも最大と最小の差が如何にも開き過ぎる事である。

例 (同一メーカーでの比較)

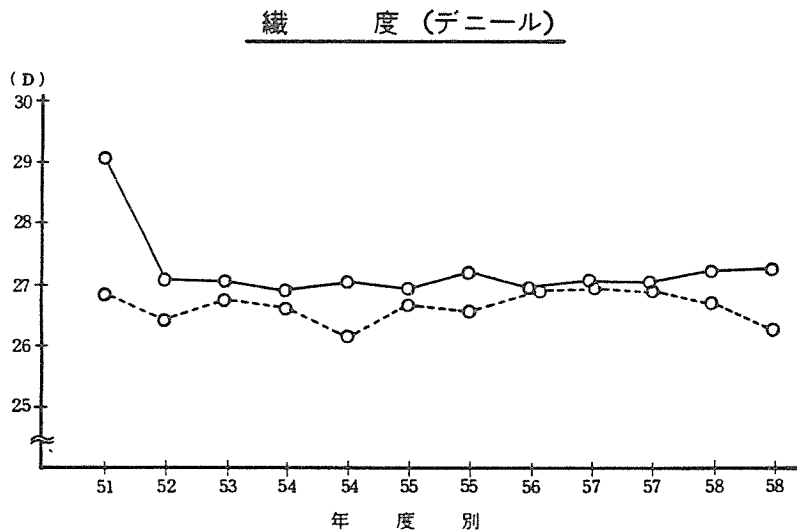
		最 大	最 小
チーズ類	A 社	29.76 d	23.80 d
"	B 社	29.49 d	22.18 d
"	C 社	32.74 d	25.54 d
か せ 類	D 社	30.71 d	23.88 d
"	E 社	30.62 d	26.41 d

上記5例は僅か一部の状態である。実際に工程中で発見除去しているものは多々あるが、27 中織度糸中に太織度 80 d，細織度 8 d の糸も現存している事は事実であり，これに依る織物への影響は大である。

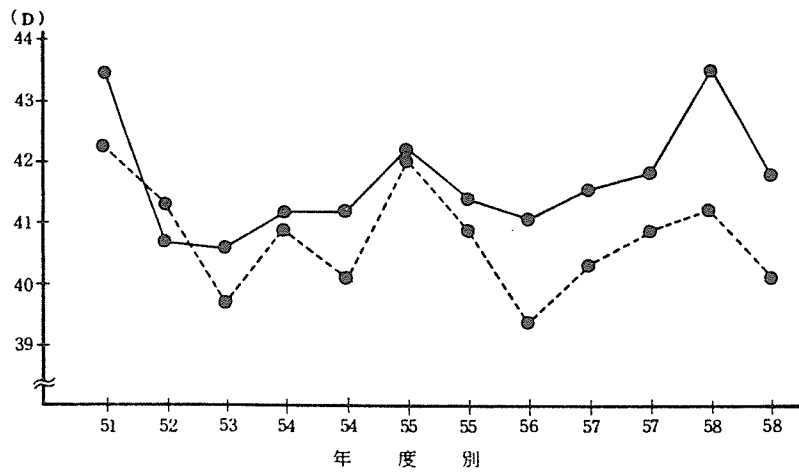
経……経筋，経糸切れ，染むら

緯……撚延数の相違に依る撚むら，シボムラ，染むら

これ等のものに付いては節，汚れと違って機屋で如何に機械を調整しても追いつく問題ではない。



織 度 (デニール)

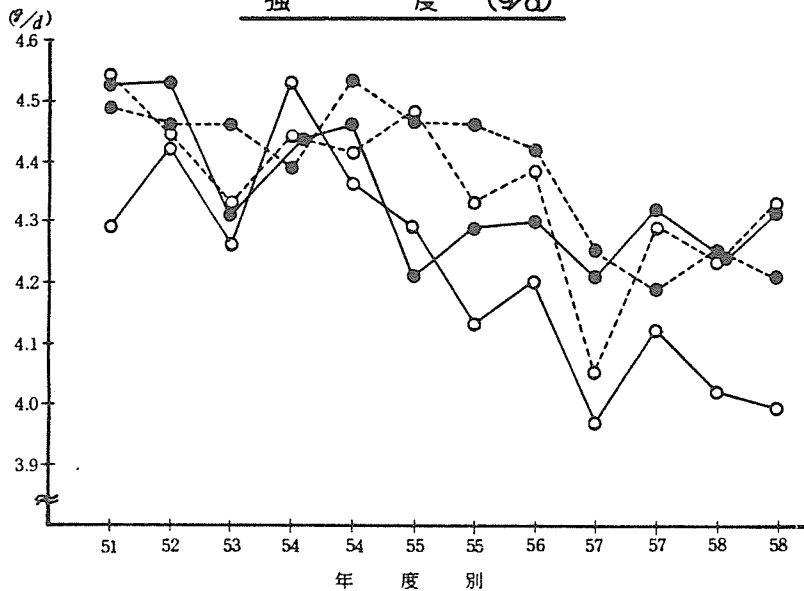


3) 強 力 (g)

		平均	変動率	最大	最小
ボビン・チーズ	58年春	112 g	7.4%	128.9 g	96.1 g
"	" 秋	108.9	4.8	116.7	97.2
かせ糸	58年春	113.3	5.8	125.7	100.2
"	" 秋	113.6	4.3	122.1	103.8

上記は平均の数値であるが、中にはボビン・チーズ区で最小 77.5 g、かせ糸区で最小 55 g の糸もあり変動率のバラツキがよく目立つ。

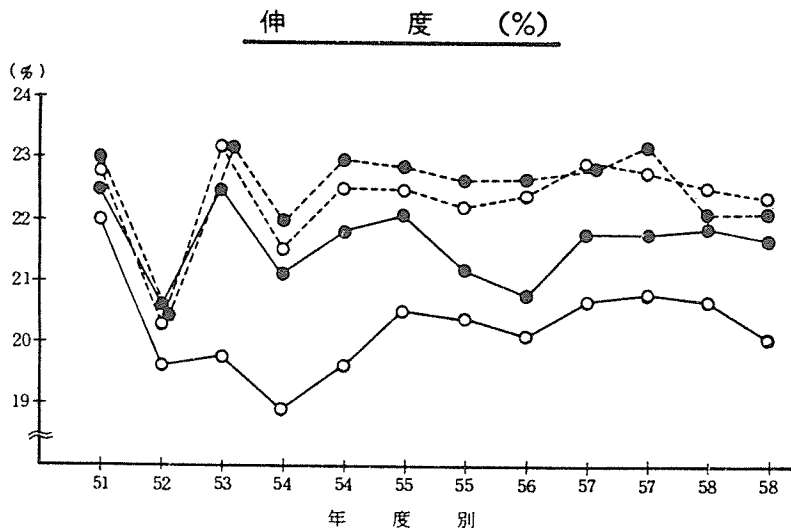
強 度 (g/d)



4) 伸 度 (%)

		平均	変動率	最大	最小
チーズ・ポビン	58年春	20.7%	8.9%	24.1%	16.0%
"	" 秋	20.1	9.7	23.1	15.6
か せ 糸	58年春	22.5	8.6	26.2	17.0
"	" 秋	22.3	7.5	25.2	18.5

上記は平均の数値であるが、個々では最小 8.0 %， 12.5 % とバラツキが多い。



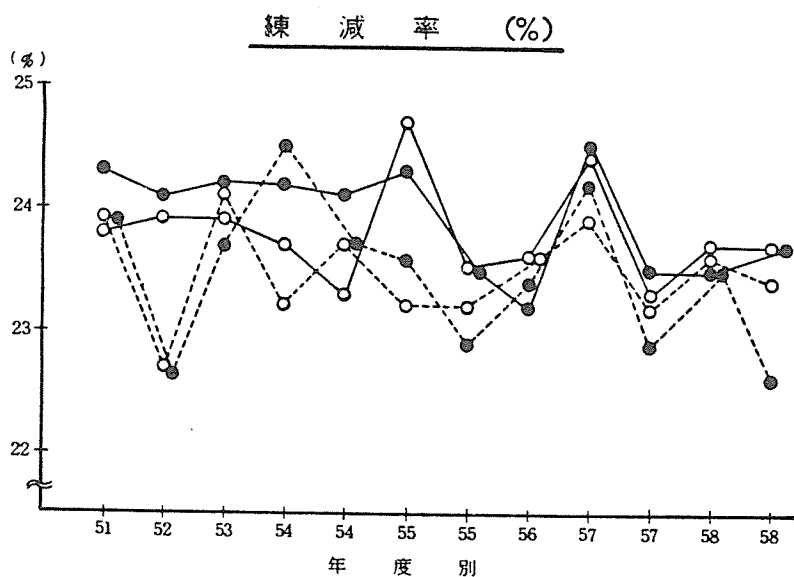
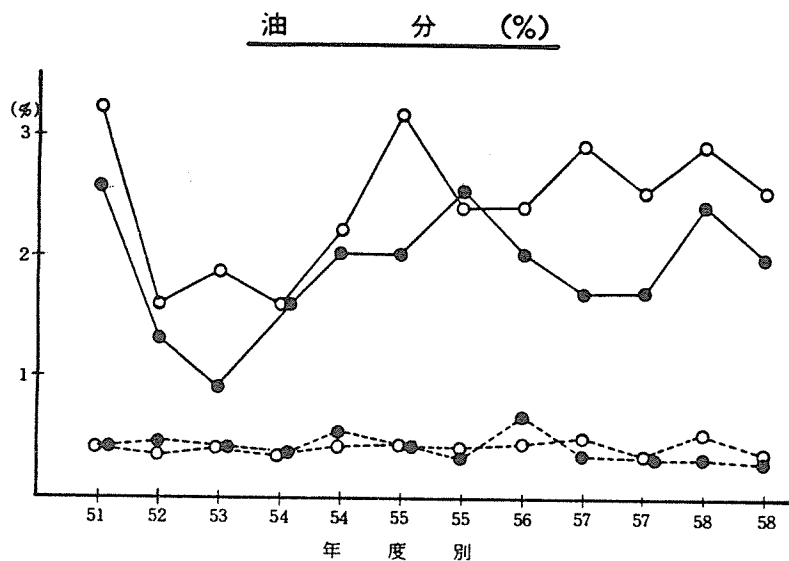
現在白生地の欠点の中で最も解明について困難なもの、一つに経筋がある。当地ではコーン，チーズよりもかせ糸を使用した方がよいのではなかろうかとの事で色々な方法で試織されてきた結果では、製織の難易度については或る程度の差は出るが経筋等は余り変らないのが現実である。経筋は製糸工程を含む製造工程で、各種の糸張力が過延伸であったり延伸むらのある場合生ずる歪の影響によることが大きいと云われ、最大伸長 27 % 以上の糸や最小伸度 8 % の巾の広いバラツキを持つ糸を経糸に使用せざるを得ない状態の中で機屋の作業工程中の管理は非常にむづかしいものがある。

5) 油分及び練減率

油分についてはアルコール・ベンゼン抽出法である。

チーズ・ポビン区とかせ区との差は或る程度止むを得ないが、中には 5.30 % の高いものがある。

練減率は油分抽出後に行ったものである。



6) 汚 れ

検査項目で汚れ糸は対象になっていないが、それだけに問題点も多くなる。従来から糸商の方々を通じ、或はメーカーの方々に現物を提示して改善を要望しているが今尚発生は多い。特に同一メーカーでの出現率に偏る傾向がある。軽度のは経の耳糸に使用するとか、緯糸であれば、反末界切にもってゆくとかして振分けているが、どうにもならない糸は製糸工場へ返送して再発防止に勉めていたゞいている現状で、いつも製糸の方々から御聞きする話の中では、原料繭が悪いからと云われますが、機屋は市場の方々に対して原料生糸が汚れていたの反物が汚れま

したと云う様な言葉は一切云えないし、又苦情も聞いていたゞけません。この様な事は節でも同じである。組合での検査、機屋での厳重な全量検査にもかゝらず市場へ出た場合は完全にクレームの対照となって返品される。

市場でも機屋以上の厳しい全量検査が行われている。白生地のみで返品されてくるものはまだよいが、機屋が最も困るのは染難品と云われるクレーム商品である。

検査で見逃がして染色加工された商品に汚点が発見された場合には、染色加工費一切を機屋が責任をとらねばならないのである。白留袖、色留袖、付け下げ等、高級品になると、縫針の糸穴程度の汚点があればもう商品としての価値は無い。汚れについても節と同じく機屋の製造工程中で、目で見取り去る以外に方法が無く対処がむづかしい。選除繭歩合が5%とか7%、10%以上である等よく聞くが、もう少し何とか川上の方でどうにか改善が出来ないものでしょうか。

結 び

昭和 58 年上、下期に分けた長浜産地使用中の生糸品質調査結果について簡単に述べてきました。この他に申し上げたい事は沢山ありますし、又一方我々が色々と御指導をいたゞき度い事もあります。製糸の方々も日夜御苦勞願っている事につきまして御礼申し上げますと共に、今後其良質の原料提供に御協力いたゞきます様御願い申し上げます。